へちまの水

小川未明

青空文庫

山へ雪がくるようになると、ひよどりが裏の高いかしの木に鳴くのであります。正雄は、縁側にすわって、切ってきた青竹に小さな穴をあけていました。

「清ちゃんのより、よく鳴る笛を造ってみせるぞ。そして、二人で林へいって、やまがらを呼ぶんだ。」

彼は、独り言をしながら、注意深く、細い竹に小刀で穴をあけていたのです。しかし、若竹で柔らかくて、うまく思うようにいかなかったのです。庭のすみに、寒竹が生えていました。正雄は、庭に降りて、寒竹を切ろうとしたのです。

「あっ、それを切っては、だめよ。お父さんが、大事にしていなさるのだから。」と、姉のとよ子が見つけていいました。

「やはり清ちゃんのところへいって、聞いてこよう。」

正雄は、駈け出しました。

「清ちゃん、どこに、そんな竹があったの。」

「君、この竹は、枯らしてあるんだぜ。釣りざおにするって、福ちゃんのおじさんが、取っておいたのだけれど、先が折れたからといって、僕にくれたのだ。こんないい竹は、どこを探したって、あるものか。」

「僕も、そんな竹が、ほしいなあ。」

「君も笛を造るのかい。そんなら、残っている竹をあげよう。そして、穴をあけたら、後で、針金で中を一度通すといいよ。」

清ちゃんは、短い竹と、針金を持ってきて渡しました。

「ありがとう。できたら、林へいって、二人で、小鳥を呼び寄せる、競争をしようじゃないか。」と、正雄は、いいました。

「それには、お寺の林がいいよ。あすこには、やまがらも、こがらも、くるから。」と、清ちゃんが、いいました。正雄は、いい竹が手に入ると喜んで、家へもどってきました。

また、もとの場所へすわって、笛を造りにかかりました。

「清ちゃんのところへいって、いい竹をもらってきた。」と、姉さんに、いいました。

姉のとよ子は、弟が、小刀を使う手つきを見ていたが、

「もう、正雄は、あかぎれができたのね。伯母さんの家へいって、へちまの水をもらってくるといいわ。」といいました。

毎年冬になると、伯母さんの家へ、へちまの水をもらいにいくのでありました。

「こんどの日曜にいって、かきも、もらってこよう。」

正雄は、そういいながら、笛を造っていましたが、そのうちに、かわいらしい管笛ができ上がりました。口にあてて、息をすい、すいと通しているうちに、ピイ、ピイ、ピーと澄んだ、いい音が出ました。

「姉ちゃん、よく鳴るだろう。」と、さも、うれしそうです。このとき、また、高いかしの木の先刻のひよどりが、飛んできて鳴いたのでありました。

「どれ、清ちゃんと、林へいって、やまがらを呼ぼうや。」と、正雄は、また駈け出しました。

いつしか、楽しい秋も過ぎ、雪の降る冬がきました。正雄は、学校の帰りに雪合戦をしたり、雪の上で、相撲を取ったりしたのです。

それは、はや去年のこととなって、今年の春、正雄は、小学校を卒業したのでありました。

雪が消えて、黒土の上に、ほこほこと暖かな日の光の射す、春のことでした。

「姉ちゃん、どこへ、へちまの種子をまこうか。」と、正雄は、紙に包んだ、白い種子を出して、ききました。

「へちまの種子なの。」

「伯母さんが、おまえの手は荒れ性だから、今年から自分の家でも、へちまの水を取るといいといったんだよ。」

「そう、この垣根のところは、どうかしらん。」と、茂ったからたちの木の立っているところを指しました。

「つるが出たら、棒を立ててやっておくれよ。」

正雄は、町の工場へいくことになっていました。自分は、このへちまの芽を見るかもしれな

いが、つるの伸びる時分には、おそらく家にいなかろうと思ったのであります。

「おまえ、体がだいじょうぶ？　どうしても町へいって働く気なの。」と、姉は、心配しました。

しかし、少年は、元気でした。非常時国家のために、りっぱに少年工の働きをしようと決心していたのです。

「だいじょうぶだよ。」

へちまの芽が出て、銀色のなよなよとしたつるが、姉の立てた棒にはい上るころには、正雄は、町の工場で、機械のそばに立って、働いていました。

彼女は、弟の身の上を案じました。あまり強いほうではないが、これから世の中の荒波にもまれていけるだろうかと、へちまのつるを見るたびに思われるのでした。そして、米のとぎ汁や、魚を洗った水などを、へちまの根もとにかけてやりました。

ある日、とよ子は、へちまを見てびっくりしました。棒から、いつのまにかつるは、からたちの木に登っていました。鋭い刺のある枝を平気で、思うかってのままに、ほうぼうへそのつるを拡げていたからです。

「あら、えらい勢いなのね。」

彼女は、これを見て、にっこりしました。弟だって、なにも案ずることがないと、気強く感じられたのでした。

盛夏のころには、へちまは、まったくからたちを征服して、電燈線にまで、手を伸ばしていました。その勢いは、さながら、秋になってひよどりのくる、あの高い大きなかしの木と高さを競い、さらに大空に浮かぶ白い雲を捕らえようとしているのでした。烈しい太陽が、その厚みのある葉に照り映えて、真っ黄色な花は、燃えるように見えました。

はたして秋になると、大きな実がいくつもなって、からたちの木は、その重みで頭を低く垂れていました。これを見ながら姉は、今年は、へちまの水をたくさん取って、寒さに向かう前に、弟へ送ってやろうと思ったのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院
　1941（昭和16）年4月
初出：「北國新聞」
　1941（昭和16）年2月5日
※表題は底本では、「へちまの水《みず》」となっています。
※初出時の表題は「絲瓜の水」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2018年6月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

へちまの水

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/